

『成形図説』 版本考

丹 羽 謙 治

1. はじめに

『成形図説』は、島津家二十五代当主島津重豪の命により、曾槃・白尾国柱等が編纂した農業百科事典ともいべき書物である。当初は百巻を予定していたが、二度に亙る江戸の大火、薩摩藩の財政窮乏、あるいは薩摩藩内の政争等々の事情により、実際に刊行を見たのは三十巻三十冊であり、以後の巻は写本として現在に伝わるのみである。

ともあれ、刊行された三十巻三十冊の版本は、現在各地の公私立図書館等に所蔵されており、『国書総目録』『古典籍総合目録』によると五十余点の存在が確認できる。しかし、大部の刊行物のせい、また農書としてその科学的な水準の高さのみが本書の意義とされてきたためか、その版本を詳しく調査する試みはなされてこなかった。せいぜい色刷本が大名・貴族への配り本であり、無彩色本と区別される旨の言及があった程度にすぎない¹⁾。本稿は、『成形図説』の版本の書誌調査に基づき、その成立過程に私見を加えるとともに版本の種類を整理することを目的とする。

文化初年に本書（の一部）が刻成し、重豪に呈上される。以後幾度も刷りを重ねる訳だが、明治に至るまで同一の板木で摺刷されたことをまず確認しておきたい。摺刷や板木の移動によって生じた板木の欠損はその時々²⁾に修補されていくが、総体的には同一の板木で刷り続けられたことが書誌調査から確認できるのである。それは、板木が完成した段階で付けら

れたと思われる匡郭の切れが、明治刷の本にもあることから明らかである。本稿で問題とするのは、基本的に『成形図説』の刷りの前後関係ということである。

因みに、『成形図説』の膨大な数の板木は、火事や戦争で烏有に帰したかあるいは破棄されたか不明ながら、行方はわかっていない。

2. 『成形図説』版本の成立について

本書は、島津重豪がはやくから計画を立てて家臣に編纂を命じていたものだが、寛政四年（一七九二）に曾槃が侍医になるに及んで編纂は大きく進捗することになる。同十一年（一七九九）には国学者の白尾国柱を加え、「童蒙といへども九穀の種類採取および百薬の粹戻良毒を分別して救餓濟急の法方をしらしむる」（提要）ため、全百巻を目標として編纂が続けられていった。しかし、この編纂事業は天災や政争による藩内の混乱等のために困難を極めた。近世後半期の薩摩藩の博物学について総体的に記述した上野益三『薩摩博物学史』から、本書の成立に関する部分を抜書きしてみよう（便宜上〔A〕～〔C〕の記号を付す）。

〔A〕文化二年五月にその最初の二十巻を藩主重豪に呈上している。これは上梓三十巻のうちの版本で、残り十巻はおくれた。世上伝本に二十巻本と三十巻本とがあるのはこのためであろう。「此書鏤版なりしに」と曾槃が書いているから、版本は四十巻分までできていたのであろう。ところが文化三年丙寅（一八〇六）三月四日巳みの時（朝十時前後）、高輪泉岳寺にほど近い大木戸の西、高輪車町から出火し、烈しい南西風のため、猛火は北へ北西へとひろがった。…（中略）…薩摩藩芝の本邸、西邸は、ともに烏有に帰した。まだ江戸に滞留していた白尾国柱は、この危急の事態を

次のように書き留めている。「吾ハ西邸ノ土蔵ニ板木六百枚ヲ運ビ納メテ封ジタリ。外ハ纏まと、内ハ急迫セルコト知ルベシ。藩邸内ノ倉ソウセン（扶持米ぐら）ハ半バ灰滅セシガ、幸ヒ成形図説ノ土蔵ハ（残）存セリ。」（もと漢文）、このあと四月朔日に国柱は江戸を辞して帰国した。この文を読めば、『成形図説』の版本は辛うじて無事であったことがわかる。…（中略）…『成形図説』が実際に大きい打撃を受けたのは、文化三年より二十三年後の文政十二年己丑（一八二九）三月二十一日の大火である。…（中略）…隅田川右岸に沿って南下した火は、明石橋に近い曾槃の家を焼き、暦年の自著がごとごとく灰燼に帰した。印板十卷分、底稿なども含まれた。この時、槃は七十三歳である。それより二年後の天保二年に、槃は悲愴な一文を草して、永年の『成形図説』編集の苦心を回想している。

〔B〕『成形図説』の整版印刷はすべて江戸で行い、その三十巻が文化元年甲子（一八〇四）十一月に刷り上った。この本は「鹿児島藩蔵版」と題し（見返し）、それよりのちの流布本が「薩摩府学蔵版」と題するのと異なる。

〔C〕版本三十巻のうち、はじめの一―十四巻は、本書作製の骨子をなす農事部であり、巻十五至二十は五穀部、巻之二十一至三十は菜部である。農事部が五百二十六丁、五穀部二百七丁、菜部三百四十二丁、合計一千七十五丁である。文化三年三月の火災のとき、白尾国柱が土蔵中に封じた板木約六百枚は、一丁分一枚として、二十巻分の刻版に相当するものの如くである。…

右に引用した『薩摩博物学史』の記述には、時系列における経過はよく整理されているものの、前後に矛盾した記述や曖昧な記述が見られることに気づく。たとえば、〔A〕で文化二年に二十巻分（の版本）が完成し、翌年の江戸大火まで

に板木が四十巻まで完成していたのであろうといいながら、「C」で白尾国柱が土蔵に封じた板木を二十巻分と推定しているが、もしそうだとすれば残りの二十巻分はどうなったのか（焼けたのか）という問題が残ってしまう。また、そもそも「B」で文化元年十一月に三十巻分が刷り上がったとしているが、翌年に重豪に奉ったのは二十巻分というのはどうしてなのか。この他にも、初印本が「鹿児島藩蔵版」と見返しにある本であるとするなど誤りも見受けられる（後述）。いま改めて成立の過程を整理しておく必要があるであろう。『成形図説』成立に関する資料で上野が用いたものは、次の四点である。

- ①曾槃「成形図説提要」（『成形図説』巻一冒頭、文化元年甲子十一月朔旦）
- ②曾槃「成形図説編次の因」（『成形図説』巻三十一冒頭、天保二年六月）
- ③曾槃「成形実録改撰 第十三條」（『仰望節録』天保三年刊）
- ④白尾国柱「白尾氏家譜抄書」（東京大学史料編纂所蔵、島津家本）

曾槃は②において「臣曾槃三十年前に、南山老公より此書編集の命を蒙、文化丙寅のとしまでに凡三十巻をえらびて以往、竹芝の西邸に編集局をもうけ木に付したり」と述べている。三十年ほども前のことを記したものであるが、丙寅の大火までに三十巻を撰んだというのは間違いなからう。しかしながら、注意すべきは大火までに「三十巻」分の板木を完成させたとは言っていないということである。三十巻の原稿は完成をみたが、三十巻分の板木がすべて完成したのは大火以後の可能性が高いと思われるのである。その根拠は、上野も言及しているが、白尾国柱が土蔵に封じて火災の難を逃れさせた「板木六百枚」である。この板木の枚数によって、当時の完成していた板木の数を推定できるように思う。上野は右の引用の最後の部分で、「一丁分一枚」として計算し二十巻分の板木が土蔵に収められたとした。しかし、編纂の責任者の一人である白尾国柱が、完成した板木の一部を漏らして土蔵に封じたとは考えにくい。もし失われたのなら後年そ

の事実に対する言及があつてもよい筈であるが、それが無いのもその証左である。この六百枚の板木が当時完成していたすべてと考へるのが自然であろう。では、その中身であるが、『成形図説』の全丁数は上野が指摘しているとおりである（ただし、後印本には巻一に「前編總目」八丁が加わるがここでは考へない）。農事部と五穀部（二十巻まで）の丁数は、七百三十三丁である。一丁分一枚と考へると百三十三枚板木が足りない。一枚の板木に対しては、表裏それぞれに一丁分を刻するのが常套であるので、六百枚の板木とは倍の千二百丁分に相当するものと思われる。三十巻分の丁数が千七十五丁であるから、一見すると三十巻分相当と見積もられるのであるが、『成形図説』の初印本が色刷本であつたことを考慮しなければならぬ。つまり、色板の数を見積もる必要があるのである。見開き一丁の絵の場合は板木二枚分と計算すると、農事部、五穀部には、板木ベースでそれぞれ七十九枚、三十六枚分の絵（合計百十五枚）が存在している。一枚の絵に対して、平均三種類の色が使われるとすれば、三百四十五枚の半分、すなわち百七十二・五枚の色板が使われることになる。四種類とすれば、二百三十枚である。色板以外の板木が、三百六十六・五枚であるから、色板を合わせるとおよそ六百枚、二十巻分の板木に相当するものと推定しうる。上野の推定と、結果的に同じになつたが、このように計算してみると色板が実に大きなウエイトを占めているかが改めて理解できる。色刷本というのはこれほどに贅沢な品なのである。以上、文化三年三月の大火までに完成した板木は二十巻分である可能性が高いことを述べた。文化三年以前に四十巻分の板木が完成したとするのは、この火事で焼失してしまったということ考へない限り無理なのである。

一方、西尾市教育委員会岩瀬文庫本の巻三十裏表紙見返しには次のような貼紙（竪十四糎、横十三・七糎、墨刷）が残っている。

薩州藏版成形圖説全百巻

第一集十巻 農事 成

『成形図説』版本考

第二集十卷 農事 五穀 成

第三集十卷 蔬菜 成

第四集十卷 藥草 近刻

右十卷一集

定價金二分二朱宛

『成形図説』の版本は、卷一～卷十四が農事部、卷十五～二十が五穀部、卷二十一～三十が蔬菜部であるが、右の貼紙から一集十卷のまとまりで販売されていたこと、その値が各々金二分二朱であったこと、第四集として藥草部十卷が計画されていたことがわかる。先に卷二十一～三十は文化三年の江戸大火以降に刻されたと推定した。

色刷本にも彫刻の段階で生じたと思われる匡郭の傷や欠損が多数存在し、墨刷本に受け継がれていくが、色刷本にはなく墨刷本に見られる大きな欠損は、卷八、二十二丁表の右上匡郭の欠損である（表2参照）。調査した墨刷本のうち最も早印本であると考えられる西尾市教育委員会岩瀬文庫・祐徳稲荷資料館中川文庫・長崎県立図書館の各蔵本にもこの欠損が見える。この傷は白尾国柱が差配して土蔵に封じた際に出来た欠損であると考えられないだろうか。

曾槩の『仰望節録』（天保三年刊）所収「成形實録改撰 第十三條」には、次のようにある（句読点を補う）。

此書四十卷鏤版なりしに、文化三年丙寅のとし三月四日高繩手の海濱より祝融の災おこりて芝邸延焼す。是に於て姑く編集局を収め、属吏數人歸 國を 命ず。但^{臣槩}一人をして後編を編集せしむ。何ぞ^{ハカラ}圖む、文政己丑の災に印版十卷火に亡びたり。底稿もまたしかり。

従来「四十卷鏤版なりしに」という記述から文化三年以前に板木四十卷分が完成したものと捉えられてきたように考えるが、これは『成形図説』全体の中で板木に刻したのが四十卷分であるという事実を示したものと解釈すべきであろう。

文中「印版十卷」とあるのは、三十一から四十巻の薬草部を意味しよう。というのは、仮に二十一から三十巻がこの「印版十巻」だとすれば、その後この部分は改めて刻されたことになるわけだが、現存する刊本の匡郭の状態を子細に調査すると、同一の板木で刷られたことがわかり、改版の徴証は得られないからである。

「印版十巻」は刻成した（あるいはその途上だったか）ものの、文政十二年（三月二十一日）の大火により印版と原稿が焼亡したとあるからは、「第四集十巻近刻」という値段表が付いた岩瀬文庫本は、文化中期から文政後期の時点で印刷されたものと考えることが可能であろう。

次に、板木成立に関する事項を年表風にまとめておく。

文化元年十一月 曾槃「成形図説提要」執筆 (①)

文化二年五月 重豪に二十巻を奉呈 (④)

(稿本完成 板木二十巻分完成)

文化三年三月四日 丙寅の江戸大火、板木六百枚を土蔵に封印 (④)

(薬草部十巻板木完成)

(薬草部十巻板木完成?)

文政十二年三月二十一日 江戸大火

「印版十巻」焼失 (③)

3. 版本の分類

数ある『成形図説』の版本を、刷りの早晩を中心に、表紙、見返しの形式をも参考にしながら、以下に述べるように数種類に分類する。

末尾に付した表2は筆者が実際に調査を行なった版本を、色刷本と墨刷本とに大別し、表紙・見返しの形態、板木の匡郭の欠損等に着目し、その印の早いものから順に並べたものである（但し、色刷本については比較が困難であるため、今回は早晩の決定を試みていない）。以下、これに解説を加える。

〔1〕 色刷本

まず、鹿児島大学附属図書館玉里文庫（天19465）の書誌を掲げる。

体裁：大本（縦二十六・六糎、横十八・四糎）三十卷二十冊

表紙：原表紙 山吹色檀紙表紙

題簽：原題簽 表紙左肩 赤色地（但し褪色） 四周双辺子持ち枠（縦十七・二糎、横三・一糎）

外題：（題簽）「成形圖説 農事部 一」

見返：白無地

前付：「成形圖説提要」〔文化元年甲子十一月朔旦 臣曾槃謹記〕

内題：「成形圖説提要」（序題）「成形圖説卷之一終」（尾題）

柱刻：「成形圖説提要」（丁付）「成形圖説卷之一」（丁付）

丁付：（柱）

本文：成形成圖説提要(五丁)・成形成圖説卷之一目録(半丁／半丁白)・本文へ最初に「享和二年壬戌秋八月穀旦 臣藤原國柱謹識」。(以下各巻頭に目録あり)

挿絵：色刷(ただし、巻二十一～三十は手彩色)。巻十六(十六才)の絵に「法橋洞龍美清筆」。

匡郭：単辺(縦)二十二・一、横十四・九糎(提要一丁才)

刊記：なし

印記：「鹿児島大學附属圖書館藏書印」(朱、長方)

備考：巻一(十八才、三十七才)、巻二(二ウ、三十八才)、巻四(五才、七ウ、十四才、二十六才、三十才、三十六才)、巻八(十五才)、巻二十(六才)の喉に、画工名「彫工 藤田金六」。

これは「挿畫に繪具もて色どりしものは諸侯方への贈呈品なりし由³⁾」というように、大名や貴族への献上用として作られた特製本⁴⁾と考えてよいだろう。実際、調査した中では、玉里文庫本の他に、静嘉堂文庫本⁵⁾・筑波大學附属圖書館本・刈谷市立図書館村上文庫本・東北大學附属圖書館狩野文庫本・東京大學総合圖書館本⁶⁾・内閣文庫本・国立歴史民俗博物館本・鹿児島県歴史資料センター黎明館本・杏雨書屋本等が、このグループに属する。玉里本はいうまでもなく玉里島津家の旧蔵書であり、筑波大本は大和高取藩主の所蔵にかかるもの、刈谷本は刈谷藩の藩校文禮館蔵書、内閣文庫本は幕府書物方蔵本であった。巻一、巻十一の本文初丁に「薩摩／藏板」の朱文正方印が捺されている(静嘉堂本、黎明館本、歴博本等)。題簽は赤色地の子持ち枠、見返しは白無地、多色刷の挿絵には「彫工藤田金六」と喉にある。この色刷本は、挿絵一葉に対して数枚の板を必要とするほどに、金と手間をかけて整版印刷の技術の粋を集めたものとなっていることは先に触れたとおりである。

